

## 事業創造大学院大学 2020 年度第 2 回諮問委員会議事録

1. 日 時 2021 年 2 月 3 日 (水) 14:00~16:00
2. 開催方法 Zoom によるオンライン開催
3. 構成メンバー  
《出席者》  
(委員長)  
岡本 吉晴 元法政大学 経営大学院 イノベーション・マネジメント研究科教授  
(委員)  
金子 浩之 亀田製菓株式会社 管理本部 総務部長  
西村 茂 日本電気株式会社 新潟支店長  
野瀬 邦生 北越コーポレーション株式会社 洋紙事業本部 新潟工場 事務部長  
兼 総務担当課長  
早川 博 株式会社コメリ 取締役執行役員  
増子 隆 株式会社テレビ新潟放送網 取締役 経営推進本部長  
吉田 至夫 新潟経済同友会代表幹事 株式会社新潟クボタ 代表取締役社長  
仙石 正和 事業創造大学院大学 学長  
五月女 政義 事業創造大学院大学 副学長・研究科長  
富山 栄子 事業創造大学院大学 副学長  
唐木 宏一 事業創造大学院大学 教授  
岸田 伸幸 事業創造大学院大学 教授  
松山 洋 事業創造大学院大学 事務局長

### 《欠席者》

- 笠鳥 公一 新潟県 総務管理部長  
藤井 方人 株式会社三井住友銀行 理事 東日本第一法人営業本部長  
三富 健二郎 新潟市 政策企画部長

### 4. <議事次第>

1. 開会
2. 前回議事録の確認
3. 事業創造大学院大学 在籍状況
4. 報告事項と質疑応答
  - (1) 新型コロナに対する本学の対応状況について
  - (2) 2020 年度分野別認証評価の認証評価結果 (委員会案) 報告
  - (3) 2020 年度秋学期の学事日程、オンライン、ハイブリッド、対面講義、ゼミ指導等の実施状況について
  - (4) 2021 年度のカリキュラム編成と教員組織について (教員配置などの状況)

- (5) EIT（起業特別演習）の活動状況報告
  - (6) 通信課程の設置検討状況について
  - (7) 博士課程の設置準備状況報告（口頭）
  - (8) 新潟地域活性化研究所の活動状況について  
新潟地域活性化研究所  
アントレデザイン塾、女性起業家育成塾の活動状況
  - (9) 海外交流協定校との取り組み（新規交流協定締結校、共同研究等）について
  - (10) その他（次年度諮問委員会委員就任継続のご依頼）
5. 質疑応答（全般）と議論
  6. 今後議論すべき課題の確認
  7. 閉会

<配布資料>

- 資料 0 議事次第
- 資料 1 諮問委員名簿
- 資料 2 2020年度第1回諮問委員会議事録
- 資料 3 2020年度秋学期事業創造大学院大学在籍状況
- 資料 4 新型コロナに対する本学の対応状況（危機対策本部通知）
- 資料 5 分野別認証評価結果（委員会案）
- 資料 6-1 2020年度秋学期の学事日程
- 資料 6-2 2020年度秋学期履修系統図
- 資料 6-3 ハイブリッド授業の実施科目について
- 資料 6-4 ハイブリッド授業のシステム構成
- 資料 7-1 2021年度事業創造研究科科目一覧（予定）
- 資料 7-2 2021年度以降のカリキュラム編成の考え方について
- 資料 7-3 2021年度教員フォーメーションについて
- 資料7(参考資料) 国費留学生優先配置特別プログラム
- 資料 8 EITの活動状況報告
- 資料 9 通信課程の設置検討状況について
- 資料 10-1 2021年2月現在\_新潟地域活性化研究所の運営体制
- 資料 10-2 アントレデザイン塾の報告（2021年1月21日現在）
- 資料 10-3 女性起業家+α 育成塾実施要綱
- 資料 11-1 海外交流協定校一覧
- 資料 11-2 ハノイ大学での講義および説明会開催報告
- 資料 11-3 泰日工業大学遠隔特別講義報告

## 5. 議事経過

### 1. 開会

研究科長 五月女より、Zoomを使用したオンライン開催についての説明を行い、配布資料を確認した。また、新たに就任された委員の紹介と、新任委員より挨拶をいただいた。

学長 仙石より本委員会の主旨および概略説明がなされ、本学に対して忌憚のないご意見を賜りたいとの挨拶により開会された。

### 2. 2020年度第1回議事録の確認

岡本委員長より前回委員会の議事録を確認の要請がなされた。

五月女：2020年度第1回諮問委員会については事前にメール配布のうえ確認をいただき、本学HPにて公開している旨の説明がなされた。

### 3. 事業創造大学院大学 在籍状況

事務局長 松山より、本学の直近の在籍状況について報告が行われた。

岡本：新型コロナウイルス感染症の脅威の中、定員160名を維持しているということは評価できる。アジアからの留学生が多く見受けられるが、4月入学と9月入学を比較するとどちらの入学者が多いのか。

松山：4月入学者が多い。

岡本：資料にM1-1とM1-2等とあるが春入学者か。

松山：現在の秋学期の時点で申し上げれば、M1-1とM2-1が9月入学者であり、M1-2とM2-2が春入学者である。

### 4. 報告事項と質疑応答

#### (1) 新型コロナウイルスに対する本学の対応状況について

研究科長 五月女が、新型コロナウイルスに対する本学の対応状況について説明を行った。

岡本：本学はPCR検査を受診するための指定医療機関があるのか。

五月女：NSGグループに病院があり、PCR検査を受検することが可能である。

岡本：学生同士の接触はほとんどない状況か。

五月女：従来通り来学し、一同に会することは難しい状況であるため、学生委員会が中心となりオンライン交流会を催す等により、フォローしている。

委員：感染予防の周知徹底は勿論のこと、感染者が出た際、クラスター防止の為の初動が重要だと考える。マニュアルの整備はなされているか。

五月女：PCR検査受検段階からのフローを整備し周知している。また、フローに則したマニュアル、報告書も整備し対応している。

委員：当社においても、体調不良となり医療機関を受診する時点からの行動マニュアルがあり、連絡網、行動履歴の記録、濃厚接触者のリスト整理等を徹底して

いる。PCR 検査結果に時間を要する為、社内で抗原検査キットを購入し、濃厚接触者に使用してもらいクラスター予防の対策を行っている。

(2) 2020 年度分野別認証評価の認証評価結果（委員会案）報告

研究科長 五月女が、2020 年度分野別認証評価の認証評価結果（委員会案）について説明を行った。

岡 本：専門職大学院は 5 年に 1 度、分野別認証評価の受審が定められているものである。本学は基本的に良い評価をもらっていると思うので、真摯に受け止め今後に繋げていただきたい。

(3) 2020 年度秋学期の学事日程、オンライン、ハイブリッド、対面講義、ゼミ指導等の実施状況について

研究科長五月女が、2020 年度秋学期の学事日程、オンライン、ハイブリッド、対面講義、ゼミ指導等の実施状況についての報告を行った。

岡 本：学生の成果発表について、今は全てオンラインで実施しているのか。

五月女：その通りである。演習委員会を中心とし、各委員会にて協議の結果、最終的にはオンラインにて成果発表という形となった。未だ渡日が叶わない学生もおり、全ての院生が講義を受講できる環境を整える必要があるため、オンライン、ハイブリッド講義の整備が不可欠となる。オンライン授業については、日本人社会人学生にとっても、勤務先から直接接続し、講義を受講できるというメリットがある。

岡 本：個別指導もオンライン対応が主であるか。

五月女：昨年 10 月、11 月までは、対面とオンラインを組み合わせたハイブリッド指導を行うゼミも多かったが、12 月以降は基本的には、個別指導を含めオンラインで対応している。

(4) 2021 年度のカリキュラム編成と教員組織について（教員配置などの状況）

研究科長 五月女が、2021 年度のカリキュラム編成と教員組織について（教員配置などの状況）について説明を行った。

岡 本：「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」で、私学で 5 名もの国費留学生の推薦枠の採択がなされたことは素晴らしく、これまで多くの留学生を獲得してきた本学の実績が評価されたと捉えることができる。

また、最近では DX (Digital Transformation) が話題となっており、内閣ではデジタル改革担当大臣をおき、重要なテーマにもなっていると認識している。本学の科目に該当するものはあるか。

五月女：DX 単独で科目として設置している形ではないが、近年の取り組みとして、基礎科目にある「IT 基礎技術」、「技術経営論」、加えて発展科目で「IT ソリューション」、「ICT 技術戦略」、「AI と応用」といった科目のラインナップの拡

充により情報技術分野を強化しており、DXについても各科目の中で不可欠な要素として取り上げていると認識している。それぞれの科目において事業創造を考える上でDigital Transformationを契機として従来のビジネスモデルをどのように変革していくのか、もしくはオペレーションを変えていかなければならないか等、色々な場面でDXについて議論されていると考える。

(5) EIT（起業特別演習）の活動状況報告

演習委員会副委員長でEIT担当の岸田教授が、EIT（起業特別演習）の活動状況について報告を行った。

岡 本：教員の指導の結果、具体的に起業の成果が報告され大変よいと思う。EITの正式名称は何であるか。

岸 田：Entrepreneurship Intensive Trackである。

(6) 通信課程の設置検討状況について

研究科長 五月女より、通信課程の設置の検討状況について報告した。

岡 本：他の経営系専門職大学院や他大学の通信課程への取り組みはどのような状況であるか。

五月女：一部の経営系専門職大学院は科目履修生なども含め、広範囲に通信とスクーリングとをうまく組み合わせて対応している。また、他の大学院では通信教育課程としてオンデマンドの授業配信を行っているケースも見られる。

岡 本：コロナ禍でオンライン化が著しいが、通信課程の導入が、現在の事業創造大学院大学（通学制）とのカニバリゼーションにならないか。

五月女：通信課程を設置した場合は、新潟県外の方が主なターゲットになってくる。現在、事業創造大学院大学は通学を基本としているため、ITを活用した教育方法を推進しているものの、新潟県内の方が主要な対象となっており、棲み分けは可能だろうと考えている。一方、一定の条件の下で遠隔地の日本人社会人のオンライン講義の受講を認めていただける形に出来れば、敢えて新たにMBA通信課程を設置しなくても、県外の方にも本学で学修できる環境を充実させるという選択肢も考えられる。

岡 本：他の経営系専門職大学院のように、定員やコース増を図ることも可能ではあるが、専任教員の増員も必要となってくる。教員が兼任することは可能であるか。

五月女：通信課程の講義は兼任という形で可能であるが、専任教員として最低限の人数が規定されており、少なくとも十数名の専任教員を配置するとなると、かなりの定員数の確保が必要不可欠となる。既存の体制の中で学生を安定確保・さらなる拡充できるのであれば、その範囲で学生数を増やしていこうという選択もあり得る。

岡 本：学部だと、通信制は昔からあるが、大学院となるとオンラインを活用し拡大するとした方がスムーズかもしれない。

五月女：現在、本学としてどのように運用していくことができるか、文科省を含めてルール等の確認を行っている。また、他県に拠点を持つ県内企業において、県外の社員も本学で学ばせたいという意向をお持ちいただいている企業があり、こうしたニーズにもお応えできるフレキシブルな学修環境を提供していきたいと考えている。

#### (7) 博士課程の設置準備状況報告

博士後期課程設置プロジェクトの委員長を務める唐木教授より、博士後期課程の設置準備状況の報告を行った。

岡 本：2年後、2023年4月の開学を目指すというスケジュールであるか。

唐 木：その通りである。

岡 本：是非 頑張ってください。

#### (8) 新潟地域活性化研究所の活動状況について

研究科長 五月女より、2021年2月現在の新潟地域活性化研究所の運営体制について説明を行い、岸田教授よりアントレデザイン塾の活動状況、副学長 富山より女性起業家+α育成塾の活動状況について報告を行った。

岡 本：新潟地域活性化研究所は、本学の下にある組織か。

五月女：本学傘下の附属研究所として設置しているものである。

岡 本：NEDO ポスト5G プロジェクトは、スマートフォンの5Gのことか。

五月女：NEDO ポスト5G プロジェクトは、5Gのその先を睨み、まず農業分野において、こうした高度な通信技術やロボットなどを活用し、多様な展開を推進しているという取り組みである。

仙 石：5Gのその先を経産省はポスト5Gと称し、総務省はビヨンド5Gと称している。6Gへ向かう手前の技術を活用してプラットフォームを構築し、農業用ロボットなどの試作・運用を含めて実際に試行してみようという発想である。本プロジェクトは、大手の5G企業の協力の基にベンチャー企業から成長してきている会社を中心になっている。このことから本学の教職員や院生が参加することにより、ベンチャー企業がどのように立ち上がるか、最先端技術をどう活用するかを産学共同で実験・検証を行う過程で、学ぶものが大きいと考えている。その意味では、本学においては、教育プログラムの一環として位置付けられると考えている。

岡 本：学生が参画し、学生の力も活用できる3年間のプロジェクトということであり、非常に楽しみである。

#### (9) 海外交流協定校との取り組み（新規交流協定締結校、共同研究等）について

副学長 富山より、海外交流協定校との取り組み（新規交流協定締結校、共同研究等）について、また岸田教授より、泰日工業大学への遠隔特別講義について報告を行った。

岡 本：本年度は現地に出向くことができない為にオンラインでの取り組みとなったということか。

富 山：その通りである。

(10) その他（次年度諮問委員会委員就任継続のご依頼）

研究科長 五月女より、次年度の諮問委員会委員就任の継続について依頼がなされた。

6. 質疑応答（全般）と議論

岡 本：本日ご出席の学外委員より感想やご意見をいただきたい。

委 員：コロナ禍におけるデジタル化の波をどの様に大学運営に組み込むかということが非常に大きなポイントになっていると感じた。これまで新潟県内の社員に向けて教育機会の提供を考え、大学院への派遣を社内公募してきたが、オンライン講義の受講が可能であれば、これからは全国に広められるという利点がある。一方、大学運営の観点から、地域の特色以上に大学自体の魅力をどう発信していくか、新潟という地域に限定されない発想の転換が重要になってくるとあらためて感じた。

委 員：本日は貴重な話を聞かせていただき感謝する。

コロナ禍においてオンラインを使用しながら更に精力的に取り組まれている点が素晴らしいと感じた。ロケーションフリー、DXの時代にあり、本拠地は首都圏にありながら、必要に応じて新潟に来て受講してもらうなど、うまく新潟を活用していただき、より快適に学ぶことが出来るという点で学生の選択肢の幅を広げられるのではと感じた。弊社でもワーケーションが話題に出ており、エリアについてもハイブリッドで対応することができると考える。また、これからはDXがキーワードになり、ITとどの様に組み合わせていくかが重要な点と考える。DX人材の輩出に期待したい。

委 員：本日は貴重な報告に感謝する。

学生の立場で感じていることとして、弊社から派遣している社員一名が未だ対面講義を経験しておらず、異業種、学生間の交流がないことに寂しさを感じているようである。コロナ禍において大変な状況かと思うが一日も早い対面講義の再開が待たれる。

委 員：定員を上回る学生数を維持していることに感銘を受けた。留学生も協定校も多く、教職員の苦労が偲ばれる。海外については現地に出向くことが難しい状況かと思うが、大学院のソーシングはどの様になっているか。

富 山：現在、基本的に海外の往来は禁止されており、渡日が叶わない学生もいる状況である。

五月女：海外の学校での説明会や面接もオンライン対応となっている。

委員：昨今の大学の状況を伺うと、オンライン化が進み、まるで通信課程の様に感じる。一方、通信課程そのものの導入については課題が多いことも理解できた。地方都市としてのメリットや企業からの社会人学生の受け入れを本学が行っていることもあり、対面、通信 複合型の講義は大学規模拡大に繋がる重要な点と考える。一方、競争の激化はあると思う。弊社から派遣している社会人学生にとっては、オンライン講義は非常に参加し易いという声も聞こえてくる。オンラインという手法はもうなくならないだろうと考えられる為、アフターコロナでも併用をお考えいただきたい。

委員：オンライン講義に移行し、成績だけは良くなったという話を他大学の教員から聞いたことがある。昨年一年、オンライン講義を行い、成績は上がったのか、変化をお聞かせ願いたい。

五月女：成績評価については秋学期の結果が確定前の為、春学期の状況で説明すると、社会人学生が出席し易くなったこともあり、少なくとも出席率は向上している。自身の担当科目については成績が上がっている。学生、教員双方に対してオンライン講義に関するアンケートを実施した結果、学生サイドでは満足度は比較的高いものの、対面交流がないことの寂しさがあるとの回答も見受けられた。必ずしもプラス面だけとは言えないが、出席率と成績評価は向上しているという傾向がみられる。

委員：オンラインで、カリスマ教師の講義を誰でも聴講出来るとなると、寡占化して良い教員を囲い込まれる様な現象にはならないか。

五月女：予備校ではオンラインではなくおそらくカリスマ教師のオンデマンド授業が進んでおり、その様な現象が進んでいるかもしれない。本学のような専門職大学院ではグループディスカッション等、リアルタイムで双方向の対応が出来るということが大きく異なる点だと考える。

岡本：同級生との触れ合いで鍛えられる部分があり、人との接触はやはり必要だとは思う。

五月女：本学では、学外等でビジネスプランコンテストが開催される際に、学生が自由に集まりチームで応募することが行われていたが、その様な取り組みがオンライン状況下ではどうしても難しい部分がある。

## 7. 今後議論すべき課題の確認

岡本：数年間、委員長として本委員会に出席しているが、新潟という地域を軸にしつつ、本学の全国展開も視野に入ってくると感じた。企業も同様に、この状況が一つのチャンスになり今後ビジネスは広がってくる。これまで新潟で培ってきたFace to Faceの繋がり、そして将来の目標である博士課程、通信教育の設置により、アジアを中心に世界への広がりを感じ、非常に楽しみである。ITを活用しながら外へ広がり、アフターコロナではやはり人と接触して繋がりを持つことにより鍛えられる部分がある。今は転換期であり、今後に大きな期待をしている。

仙石：長時間に渡りご参加いただき、また、委員の方々から貴重なご意見を賜り、感謝したい。

コロナ禍という特殊な時期に主にリモートで修了した学生が社会に出てどのように活躍してくれるのか、関心を持って見守っていきたい。個人的には、コロナ禍でリモートでの学習が便利なようで、一方で教員も学生もリモートにまだ慣れておらず、対面の時のようには学習できずに修了することを危惧している。人間同士の直接の触れ合いが少ないことから、リモートによる講義では人間形成が養われているのか疑問に感じている部分もある。現在、世界的なネットワークで遠隔授業に関する調査結果を多くの大学から持ち寄り意見交換をしており、その検証結果を常に見守っているところである。本学でも、研究科長からの報告の通り、学生、教員にオンライン講義に関するアンケートを行っており、今後も課題を洗い出し、世界の情報も参考にして継続的に改善して参りたい。

コロナ以前からDXやデジタル化の重要性は指摘され、コロナによってそれがスピードアップしたと感じておられると思う。コロナ禍及びその後の社会、経済的变化は大きいと予想されており、解決すべき課題は、過去の経験や知識では対応できないことから、本業以外に副業の勧め、週休三日制など、継続的な自己学習の必要性が認識されつつある。このような時に、本学の役割の重要性は一層増すと考えられ、こうした潮流に乗り遅れないように、将来を見据えた対応をしていきたい。

先程、岡本委員長からもお褒めいただいた通り、「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」において5名もの国費留学生の推薦枠を獲得できたことは非常に大きい成果と考えている。大学の評価は修了生で決まると考えられ、本学は成長著しい国々のトップクラスの大学と交流協定を締結する努力をしており、その協定校から優秀な学生に入学していただき、本学を修了後その修了生が世界で活躍することが本学の財産となる。今後の社会状況変化や産業の流れも見極めながら、地に足を付けて進んでいきたいと考える。

## 8. 閉 会

五月女：これで2020年度第2回諮問委員会を終了する。

以 上